

## 越前府中とアーネスト・サトウ—齋藤修一郎英文自伝補遺②—

2017年10月22日日本英学史学会第54回大会

本学会員 川瀬健一

### はじめに：

私の母方の曾祖父齋藤修一郎（1855－1910）は、明治7年に英語・化学・歴史教師のグリフィス William Elliot Griffis（1843 - 1928）の求めに応じて書いた「英文自伝」（1874年3月筆記）において、故郷武生（越前府中：福井県越前市）から東京に出てきて英学を通じて西洋の学問を学んだことでいかに自分の人生観や世界観が変わったかを述べていたが、その一節に、「（故郷武生にいる間は）彼は外国人についてはほとんど何も知らなかったのだが、外国人は、非人間的で容赦の無い性格の野蛮人であると考えていた」と記述した。原文を示せば「and having thought that the foreigners, of whom very little was known at least to him, are **【were】** more barbarians of unhuman **【inhuman】** and cruel dispositions,」である。<sup>1</sup>

しかし齋藤修一郎の父七世齋藤策順（1826－1858）は高名な蘭方眼科医師であって、越前に最初に種痘を普及させた（1850年1月のこと）立役者の一人であり、修一郎自身も、幼い時に種痘を受けていたおかげで天然痘にかからず無事成長した一人であった。そして父の弟の大雲正意・蘭溪（？－1870）も蘭方内科医師であり、越前府中は、当時でも最も蘭学の成果を取り入れて富国強兵に勤んでいた福井藩の第二の都市で、付家老本多氏の城下町。このような西洋学については先進的な環境に育った修一郎が、先のように「外国人は、非人間的で容赦の無い性格の野蛮人である」と考えていたことがどうにも腑に落ちず、ここ数年その背景を考究してきた。

その研究の中で、修一郎が12歳の時に、彼の故郷越前府中を、三人の外国人が訪れ、彼の家の隣家に宿泊した事実を見つけた。その外国人とは、当時の英国公使館の書記官ミットフォード Algenon B. Mitford (1837－1916) とその中国人従者、そして日本語通訳官のアーネスト・サトウ Ernest Mason Satow (1843－1929) であった。

時は、1867年（慶応三年）の8月16日・17日（陰暦では7月17日18日）のこと。

三人が宿泊したのは、齋藤修一郎家の隣家で、本陣の大文字屋であった。

サトウの越前府中訪問についてはサトウの日記に詳細な記述があり、その日本語訳は、萩原延寿の『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』の第五巻『外国交際』（朝日新聞社1999年刊）のp216・7に全文翻訳され掲載されている。そして大事なことは、この時サトウらを訪問した本多家家臣が、齋藤修一郎とは遠縁の関係にある、寺社町奉行兼の本多駒三郎らであったことだ。

本報告は、アーネスト・サトウの日記と、当時の本多家医師筆頭の皆川澤元の日記<sup>2</sup>を典拠として、アーネスト・サトウらと本多駒三郎らの会見の様子と、初めての外国人訪問に沸く府中市民の様子を明らかにすることで、この訪問が、齋藤修一郎の外国観にどのような影響を与えたのか与えなかったのかを考察することが目的である。

<sup>1</sup> 「英文自伝」の全文は、「東日本英学史研究」第11号（2012年3月刊）に掲載。

<sup>2</sup> この日記は、東京大学総合図書館所蔵の「皆川家文書」の中の6）に納められた「第四号慶応三年卯年ヨリ明治四年マデ・公私雑記手留」である。「皆川家文書」には明治12年頃までの種痘関係の医事記録や、澤元が主宰していた俳句の会の記録などの詩歌往来記録、さらには、安政二年（1855）十二月から明治四年（1871）までの日記が含まれており、特に日記には、澤元が京都に遊学して蘭方医学修行をした記録から、帰京後本多家医師となつての公務の記録、さらには本多家医師筆頭となつてからの公務記録や当時の様子のわかる公文書の写しなど、時代を表す史料が満載である。なお日記には澤元が本多氏に従って従軍した幕府の第二次長州征討（慶応元年・1865）の記録も含まれる。

## 1. アーネスト・サトウの北陸道の旅：

英国公使館の書記官ミッドフォード Algenon B. Mitford とその中国人従者、そして日本語通訳官のアーネスト・サトウ Ernest Mason Satow の三人は、1867年8月10日から8月22日（慶応三年七月十一日～二十三日）に能登の七尾から大坂までおよそ総長 360 kmの内陸旅行を敢行した。

この旅は、外交官は日本の国内どこへでも自由に旅行できるという条約で確認された特権を行使したもののだが、元々は、将来の日本海側の開港場をどこにするかということと、候補となっている新潟港が、荒天などで船が入港できない時の予備の港をどこにするかを、イギリス公使パークスが実際にその目で確認するために行った、横浜―函館―（日本海岸の各地の港）―長崎を経て横浜に戻る船旅の一環であった。

この船旅は1867年7月23日（慶応三年六月二十二日）に横浜を出港し、7月27日（六月二十六日）函館到着、8月1日（七月二日）函館出港、8月2日（七月三日）新潟到着、8月5日（七月六日）新潟出港し佐渡入港。8月6日（七月七日）佐渡出港、8月7日（七月八日）能登七尾到着、の日程で行われた。

そして七尾港は天然の良港であるが、活発な商業活動が行われているわけではなく、しかも金沢藩が開港場とすることには不承知であり、幕府の直轄地である新潟の方が開港場としては適切であり、七尾は荒天のための予備の港とすることにイギリス公使パークスの意思はここで決まった。さらに、七尾の西の日本海側の諸港、三国・小浜・田辺・宮津の諸港はすでに別の通訳官による視察が終わって候補からは外れ、越前の敦賀もすでにパークスが陸路で訪問して不適格であることを確認していたので、これ以上開港場と港の選定の旅は必要がなくなった。

そこで、パークスは一路長崎に直行し、その後大坂に立ち寄って横浜に戻ることにした。

さらにこの際にパークスは、せっかく七尾まで来たのだから、ここから陸路で大坂に向かうこととし、その途次で、金沢の加賀藩主と福井の福井藩主とに会ってみようと考えて加賀藩に打診したが、加賀藩に断られたので断念し、その代わりとして、書記官ミッドフォードと通訳官サトウの両名に、陸路大坂まで向かわせることになった。

こうしてミッドフォードと彼の中国人従者、そしてサトウの三人の外国人が加賀藩や福井藩などの街道沿いの諸藩の藩士に護衛されながらの、10日余りの旅が始まった。

その経路と日程は、資料1「アーネスト・サトウ北陸道の旅」を参照。

## 2. サトウらの越前府中訪問の様子：

一行三人が越前府中を訪問した時の様子は、サトウの日記に詳しく記されている。8月16日の項の最後の部分である<sup>3</sup>。

Arrive at Fuchiu by 8.45 crossing the Shirakijogawa [白鬼女川] by a bridge of a single plank's width. Horrid long town, with stream down the middle. Noisy crowd collect to see us, running along on the other side of this stream. Hotel furnished with chair & Chinese tables & shibugami [paper treated with astringent persimmon juice 渋紙] on the floor. Little boys to fan us again. The jodan [upper level room for important guests 上段] is shut up & shibugami spread in our bedroom also, check! Jishabugio [official supervisor of shrines and temple 寺社奉行] Honda Komasaburo

<sup>3</sup> 英文は、「The Diaries of Sir Ernest Mason Satow 1861-1869」（Eureka Press 2013年刊）p236による。翻訳した和文は、萩原延寿著『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄』の第五巻『外国交際』（朝日新聞社1999年刊）のp216・7による。

& Machibugio [municipal administrator 町奉行] Wada Keinoske call, & talk the usual bosh. Fuchiu ancient capital of about 3000 houses. Curious manufacture of marbled paper, cotton cloth & silk, called Torinoko; also sickles & knives in large quantities. Houses of ill fame.

「一枚の厚い板で出来た橋を渡り、白鬼女川を越えて、午後8時45分、府中に着く。長くのびたいやらしい感じの町である。町の中央を川が流れている。騒々しい群衆がわれわれを見物しようと集まってきて、川の向こう側を走ってゆく。宿屋には椅子と中国製の机が用意され、床には『渋紙』が敷いてある。少年がうちわであおいでくれる。『上段(の間)』は締め切っており、われわれの寝間にも『渋紙』が敷いてある。なるほど、そういうものか。『寺社奉行』本多コマサブロウと『町奉行』ワダケイノスケがやって来て、例の如く馬鹿気たことをいう。府中は昔国府の所在地であったところで、現在人家は約三千である。ここの特産は、『鳥の子』と呼ばれる淡黄色の紙、木綿、絹である。また鎌と包丁も大量に作られている。いかがわしい宿もある。」(萩原延寿著『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』第五卷『外国交際』朝日新聞社1999年刊 p216・217)

サトウは、町の中央を川が流れているように記したが、正しくは、町の中央を南北に貫通する北国街道の中央を水路が流れており、その片側をサトウ等一行が通交し、反対側を見物に集まった群衆が走っていた<sup>4</sup>。

越前府中は当時、福井藩32万石の筆頭家臣(付家老)を務めていた本多氏2万石の城下町であり、この時、ミッドフォード・サトウら一行を接待した本多家家臣は、御用人で寺社町奉行兼任・100石取の本多駒三郎(1839-1898)と御奉行添え役・12石二人扶持の和田敬之助である。本多駒三郎の家は本多九郎左衛門を代々当主とした本多家の一族で家老を務める家柄であり、当時駒三郎の本多家家臣団の中での席次は八番目。家老三人(高木七左衛門・松本右馬丞・大貫傳太夫)に次ぐ、番頭格12人の中の4番目の席次であった<sup>5</sup>。

この時の一行の越前府中訪問の様子は、当時本多家お抱えの医師団筆頭(御匙頭)であった皆川澤元(文仲)の日記にも慶応三年7月17日の条の付記として記されている。

夜遅ク付記 夷国人三人併ニ公儀ノ役人大文字屋方ニテ止宿。通り三町筋箒手桶等を出し、専ら提燭を張。且又見物ミ人大群集。

「公儀の役人」とあるが、正しくは福井藩の役人である。「公儀」である幕府役人はこの旅には随行していない。

#### ●外国人一行を迎えた越前府中の様子：

短い記述であるが、ミッドフォード・サトウら一行の宿舎が、本陣(大名の泊まる宿)である大文字屋であることと、この宿に至る通り(北国街道)三町(約328m)は掃き清められ、そのことを明示した記しとして家々の前に箒を立て手桶を置いた。さらに街道沿いは提灯が張られて赤々と照明が行われ、そこに外国人一行を見ようと集まった物見高い群衆が集まっていたことを記している。

サトウの日記でも、府中に入った途端に、一行を見ようとする大群衆が、彼らの籠を追いかけて、北国街道の中央を流れる小川の反対側を駆け回り、大声を上げて追いかける様子が描かれていたが、一行の宿の本陣・大文字屋の前には、夜になっても大群衆が集まっていたことがわかる。

<sup>4</sup> この点は、サトウの著書『一外交官の見た明治維新』(原題『A DIPLOMAT IN JAPAN』)では正しく書き直されている。「running along the other side of the stream which lay along the middle of the street.」と。『一外交官の見た明治維新』(坂田精一訳 岩波文庫)では下巻のp30。

<sup>5</sup> 本多等の役職などは、『丹南史料研究第二集 武生越前府中本多家家臣録(2)』(丹南史料研究会1994年刊)所収の、1864(文久4年)ごろの本多家給帳による。

さらにサトウの日記では、宿泊した本陣では、大名が泊まる上段の間は締め切られ、サトウらの寝間には畳の上に渋紙が敷かれていた。日記の他の箇所と同じような待遇に直面したサトウは、宿の主人を怒鳴りつけて上段の間を開けさせて使用し、床の渋紙も剥がさせたと記している。そしてこれは、外国人が無作法にも靴のまま部屋に入って汚されては困るとの配慮からだと言っている。サトウは記す。

このあたり、外国人に初めて接して戸惑う様子が垣間見えて興味深い。

この本陣・大文字屋の裏手の天王寺町に、大文字屋の裏手に接して建っていたのが、齋藤修一郎の生家である。間に水路があるが、二つの家屋は互いに裏庭で接していた。(資料2 越前府中の地図)

当時満で12歳の齋藤修一郎も、この大文字屋の前に集まった大群衆の中にあっただであろうし、もしかしたら、庭同士が接していたので、庭の生垣越しに外国人の姿が見えないか覗いていたのではなかろうか。

### 3. サトウらと府中本多家重臣との会談の内容：

ところで府中本多家重臣とサトウ等一行の会談の内容が気になるところである。

しかしサトウ日記は、「call, & talk the usual bosh. (やって来て、例の如く馬鹿げたことをいう)」としか記さない。

このサトウの表現、「例の如く馬鹿げたこと」をサトウ日記で追いかけてみたのだが、こうした表現は他の箇所では見当たらない。一か所、この府中訪問の少し前のところで、8月2日の項であるが、新潟に逗留していたときのこと、白石下総守という新潟奉行がやってきて話をした。白石は1864年から65年にかけて神奈川奉行をしていたためサトウとも何度も会っているようで、「and alluded with regret to the absurd arguments that in former days it was his duty to maintain(かつてはあのような馬鹿げたことを主張するのが私の任務であったと、白石は後悔している口ぶりであった)」と述べた場面が記されていた。

ここはサトウの著書『一外交官の見た明治維新』では、「契約不履行の日本商人に対するイギリス臣民の損害賠償や関税問題など」について白石と議論したが、この当時のことを白石が回想して「やむなく貴殿に対し反対意見を主張しなければならなかったが、今から思えば馬鹿げた議論であった」と暗に後悔のほどをほめかしたとある<sup>6</sup>。

この越前府中における本多と和田との会話とは無関係の様である。

サトウが、本多家重臣との会話を「馬鹿げたこと」と言うのには背景がある。

この旅の途中で金沢に立ち寄った折にはサトウは、加賀藩重臣との間で、極めて政治的な会話を交わしている。

一つは8月8日七尾でのこと。七尾の町奉行阿部甚十郎と。阿部が前年にイギリス公使一行が薩摩を訪問したこととその内容に関心を示した。この話の中でサトウは阿部のリクエストで、サトウは自身の日本の政治についての意見を阿部に示した。「大君政治は日本全体を治めているのではなく、その一部を治めているにすぎない」と。阿部はこの意見に同意の様子であったとサトウは伝える。

二つ目は8月13日の金沢でのこと。この夜サトウらの宿所を訪ねた金沢藩の恒川新左衛門・藤懸十郎兵衛・有沢新右衛門<sup>7</sup>と政治の話をした。彼らは「幕府は存続させるべきだが、その権力は妥当な

<sup>6</sup> 『一外交官の見た明治維新』(岩波文庫)では下巻のp10・11。

<sup>7</sup> サトウと会った金沢藩士の役職などをサトウは、「七尾の町奉行阿部甚十郎」以外は記さない。サトウの宿に藩主の書簡を持参した藤懸十郎兵衛は、500石取の馬廻り役の家の者で、当時は藩主側近。彼にミットフォードが書いた札状が「加賀藩史料、藩末編下」(前田育徳会昭33)にある。サトウの宿で懇談した恒川新左衛門は、元治元年(1864)6月に幕府が加賀藩主に出した京都御所辺の警備を命じる幕府からの指示書(金沢市立玉川図書館近世史料館・加越能文庫・本藩歴譜書継留内)の宛先が、「松平筑前守(前田慶寧)内恒川新左衛門」となっていることから、この人物もま

藩内に制限されるべきで」と言った。これにサトウも同意したのだが、彼ら金沢藩士は、サトウが前年にジャパン・タイムズに書いた論文（日本語訳は『策論』・英国策論）<sup>8</sup>を読んでいたとサトウは伝える。

外様雄藩である金沢藩としては、幕府が外国貿易場を幕府直轄領だけに限り、しかも外国商人との取引を幕府の許可を得た商人だけに限ってその利益を独占していることに大いに不満があったようである。この点では薩摩や長州などとも同じなのだが、薩摩・長州以上に幕府との関係が長く親密であった金沢藩としては、幕府から政権を奪取するのではなく、その権限を大幅に制限した上で存続させ、サトウが主張したように、日本を有力諸大名の連合体に組み替える案に賛成していたものと思われる。この両者の見解は、後の幕府將軍徳川慶喜による大政奉還と大名会議の設置に合意した諸大名多数派の見解と同じである。

薩摩や長州、そして伊予・伊達氏だけではなく、加賀金沢藩にも自身の政権構想が受け入れられていることが会話の中で明らかとなって、サトウは大いに気を良くしたのであろう。

しかし旅は金沢藩領を超えて福井藩領に入ると待遇は俄然変化する。

金沢藩は重臣に 20 人ほどの衛士を付けて一行を護衛したが、福井藩領にはいると護衛は来ず、最初は同心だけ。しかたがないので加賀藩の親族である大聖寺藩の衛士を借りて藩境の中立地帯を超えたが、福井藩領に入って迎えたのは目付という下級役人一人と数人の衛士。そして福井で休息したおりに藩の重役は顔は出しても会話せず、接待したのは藩校の英語教師瓜生三寅(1842—1913)一人。さらに福井藩の護衛は態度が悪く、日本語がわからないと思ひ込んで、大声で英国人の悪口を言い合っている。そしてやっと福井藩領の最後の地である府中で、福井藩重臣本多家の家臣が出迎えたが、ここではまったくサトウにとって楽しい会話はできなかったのだろう。

サトウにとって、福井藩領の旅行は、楽しいものではなく、むしろ不愉快だった。

このあたりの福井藩の対応についてサトウは、日記では「越前藩にとってわれわれは歓迎されざる客である」と記しただけだが、『一外交官の見た明治維新』では次のように解説している。

「越前の藩主は実に、徳川將軍家の創始者たる家康の子息の後裔であり、大君の家とは濃い親戚関係にあった。藩主は大君の地位のあぶないことを十分に予見してはいたが、さりとて天皇の政権復活を企図する薩摩や長州に加担することは考えていなかった。また、私がパンフレットで述べたイギリス公使館の政策なるものを十分に承知はしていたろうが、従来の幕府の綱領には外国人との親睦をはかるといふことはないので、最近大君の政府が外国人に対する態度を変更したにもかかわらず、われわれに対して大いに冷淡な態度を示すことを自らの賢明な策だと考えていたものらしい。」と。また「越前の役人の誠意の欠如は、われわれに対する極端な警戒心から出ているものと解釈したい」<sup>9</sup>とも。

もしかして本多駒三郎らが言った「例の如く馬鹿げたこと」とは、その直前、8月15日に尋ねた大聖寺藩の町奉行との会話の中で、「例によって、われわれの吸う葉巻につよい好奇心があつまる。またわれわれの使うパイプが何で出来ているのか、どうして火持ちが良いのか、だれもわからないらしい」<sup>10</sup>とサトウが日記に述べているような、たわいもない、西洋への関心からくる日常会話であった可能

---

た藩主側近。同じく 500 石取の馬廻り役の家のもの。有沢新右衛門も 550 石取りで、有沢流兵学者。藩主御使番。

<sup>8</sup> これは、元来無署名で、1866年に横浜の英字週刊紙「The Japan Times」に3回に分けて掲載された。これをサトウが自身の日本語教師の阿波藩士に手伝ってもらい和訳し阿波藩主に提供したところ、写本が広まり出版されて広く読まれた。内容は、「將軍は諸大名の最大の一つであって全国を統治していない。したがって条約を完全に履行する力をもたない。日本は今後、天皇を元首とする大名連合国家に移行すべきである」と主張し、これは当時のイギリス政府の内政に干渉しないとの見解とは異なったが、イギリスの対日政策を示すものと誤解され広く読まれ影響を与えた。

<sup>9</sup> 『一外交官の見た明治維新』（岩波文庫）下巻 p 30・31

<sup>10</sup> 原文は「Cigars cause great wonder as usual. No one can understand what our 'pipes' are made of and how they keep in so long.」である。訳文は、萩原延寿著『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』の第五巻『外国交際』（朝日新聞社 1999 年刊）p213。

性もある。

#### 4. サトウらの越前府中訪問と齋藤修一郎：

残念ながら、齋藤修一郎が越前府中を訪れたサトウ一行を見たという記録はない。しかし状況から見て、彼もまた初めて府中を訪れた外国人一行の見物をしたことは確実だろう。

そしてサトウらと面談した本多家重臣・本多駒三郎は、修一郎とは遠縁の関係にある（資料3：齋藤家と本多家関係図を参照）。さらに齋藤の北側の隣家は本多家医師筆頭の皆川澤元の家で、この家も齋藤と遠縁の関係にある。

おそらく本多家重臣の一人がイギリス公使館の一行と面談したくらいのことは伝え聞いたであろう。だがこのことが齋藤修一郎の異国観にどのような影響を与えたか。ここは不明である<sup>11</sup>。

#### 5. 成果と今後の課題：

今後の課題であるが、当時の越前府中本多家家中の人たちがどのような異国観を持っていたかを調べるのが重要だ。なぜなら齋藤修一郎を育み、彼の思想形成に影響を与えたのは、府中本多家の重臣であった彼の近親者や本多家の「藩校」の教師たちであったからだ。

この家は幕末において蝦夷地開拓を行っており<sup>12</sup>、当時の事情を知る幕末の家老・松本右馬丞（晩翠）（1833—1888）は、後にその蝦夷地開拓地に行っており、かの地で読んだ漢詩集も残っている。蝦夷地開拓は19世紀初頭からのロシアの脅威から国土防衛を謀って行われた。従って、本多家家中には、ロシアを始めとした西欧諸国の脅威の認識もあったはずである。そして先にも見たように、福井藩（本多家も）は当時でも最も洋学の成果を取り入れて近代化を進めた藩であり、齋藤修一郎の家も親族も蘭方の医者であり、遠縁の者たちは本多家重臣たちである。彼らは西洋の科学（軍事科学と医学）が優れたものであることは知っていたし、その歴史（強大な軍事力を背景に世界を植民地と化してきた歴史）も知っていたものと思われる。

とすれば修一郎の英文自伝にいう「野蛮人」との表現は、文字通りのそれではなく、武力を背景にして世界を植民地化してきた「道徳的には劣る人々」との意味合いである可能性は大である。

松本右馬丞（晩翠）の蔵書は、越前市立中央図書館に寄贈され（「松本文庫」2874冊）ている。さらに同図書館には、府中本多家出身で福井藩士であり、坂本竜馬らと海援隊で活躍し県知事や大審院評定官などを経て貴族院議員（男爵）となった山本龍二郎（関義臣）（1839—1918）の蔵書（「関文庫」1100冊余）があり、さらに本多家家臣で江戸住の儒者で、後にパリに留学して法学士となり、帰国後大審院判事となった栗塚省吾（1853—1920）の蔵書（「栗塚文庫」1582冊）が残されている。これらの中に西洋の事情が分かる本がどの程度あるか、調査してみたい<sup>13</sup>。

<sup>11</sup> 齋藤修一郎とアーネスト・サトウとは後年に晩餐会を一度共にした。サトウが日本駐在公使である1898年（明治31）1月17日。齋藤は当時、中外商業新報（現・日経新聞）社長。晩餐会出席者の主なものは、日下義雄（第一国立銀行監査役）・添田寿一（大蔵省次官）で、三人とも井上馨直系の元官僚。長岡祥三ら訳『アーネスト・サトウ公使日記』（2008年新人物往来社刊）のⅡのp41。

<sup>12</sup> 府中本多家は、弘化年間初年から文久年間までの20年ほど、蝦夷地の「野間追」で開墾を行った。そのきっかけは、隅田無六なる藩士の後妻が越前大野藩の人で、この縁から蝦夷地開拓は随分利があるとの情報が入り、勝手掛藤田文内と隅田無六が測量に向かって開墾地を決め、その後は隅田が現地に住み込んで、送られた多数の農民を指揮して開墾にあたったが、20年ほどして文久の財政改革の折に中止された（「武生郷友会誌」第43号大正13年刊・「北海道野田追開拓顛末」松本源太郎筆）。松本右馬丞・晩翠の漢詩。「野田元是我農郊、廿歳焦心付水泡、行見郷人家八九、独揮流涕灑荒芽」。「本多家家臣録」では隅田六二（伊織）・「蝦夷掛」とある。

<sup>13</sup> 「関文庫」には福澤諭吉の『西洋事情』が四冊（慶応四年刊）あることは確認された。